

乙女高原が好き！ 2504 号

有志による草刈りボランティア

まだ記憶に新しいと思いますが、今年は各地でクマによる被害が相次ぎ社会問題とまでなりました。乙女高原におけるこれまでの活動ではクマとの遭遇は皆無であり、草刈りボランティアでクマに遭遇する心配は無用と考えられます。しかしながら、世の中に不安がまん延していること・万が一遭遇した場合の危険度の大きさを鑑み、「県や市と共催で、イベントとして行う、草刈りは中止」という苦渋の決断をするに至りました。

とは言っても、乙女高原の草原を保全するためには草刈りが欠かせません。草刈りを怠ると、草原は森林に遷移してしまいます。今のままの乙女高原を次世代へと残すため、有志に呼びかけて草刈りを行いました。

～ 有志による草刈りボランティア その1-① ～

11月15日(土) 記事：植原 彰

「有志による」活動ですから、どの時刻に来て、どの時刻に帰ってもいいのですが、一応、集合時刻の目安を9:00としました。いい天気、しかも、暖かく、活動しやすい1日でした。何人来てくれるか心配でしたが、ふたを開けると15人もの「乙女高原ファン」が作業してくださいました。「有志による」活動ですから開会のセレモニーはなく、来た順に手袋やお茶をお渡しし、作業に取り掛かっていただきました。

まずは遊歩道のロープを杭から外し、回収する作業です。例年だと回収したロープをロッジの駐車場で巻き直します。来年の「遊歩道作り」でロープをスムーズに(絡まらないように)伸ばすためです。今年はそのを行う余裕はないので、「ロープの達人」雨宮さんから回収の時に簡単に束ねる工夫を教えてください、回収したロープはそのまま裏の倉庫に運びました。刈り払い機を持ってきてくださった方には、端から草を刈っていただきました。

「草刈りボランティア」が中止になったことで、皆さん、たくさん働こうという意欲満々でした。とてもとてもありがたいのですが、あまりに根を詰めると思わぬ事故につながるのが心配です。10時すぎにはいったんベンチに集まって、一斉に休憩を取りました。そしたら、びっくり。次から次へと差し入れです。手作り干し柿、手作りマロングラッセ、手作り漬物、手作りサツマイモのおいしいの、リンゴ、お菓子、……。これらを順々に食べていたら、働く気が薄れてきました(笑)。



気を取り直して、後半戦です。前半戦でロープ回収は完了したので、ツツジ・コースを中心に草の手刈りを行いました。刈り払い機ではツツジの株に入り込んでいる草は刈れないからです。若い木もたくさん生えているので、それを刈るには、のこぎりも必要です。刈り払い機持参の方には、前半に引き続いて、とにかく草を刈っていただきました。

12時半を終了時刻とし、再度、草原内に散りました。そして、1時間ほど作業をし、今度はみんなでお弁当を食べました。デザートは手づくりシフォンケーキとチョコレートなどでした。記念品として、杉田さん作成のポストカードサイズ2026カレンダー「乙女高原のキノコ」をお配りし、中締めとしました。作業をしてくださった15人の皆さん、本当にありがとうございました。

なお、作業の前と途中で、角田さんが(いるかどうか分かりませんが)クマを脅かすために花火をあげてくださいました。5連発の打ち上げ花火でした。また、植田さんと松林さんがクマ撃退スプレーを持参してくださいました。

～ 有志による草刈りボランティア その1-② ～

11月15日(土) 記事：植田 幹夫

第24回「乙女高原草刈りボランティア」の準備作業の替わりの作業を11/15(土)に乙女高原ファンクラブの代表世話人、案内人、ファンクラブ会員、一般参加者合わせて15名で実施しました。今回の作業は、昨今の「熊による死傷事故」多発により「草刈りイベント」は中止になってしまいましたので、遊歩道のロープ外し回収作業〔予定通り〕と手鎌、刈払機による草刈り作業〔急遽変更〕を行いました。

集合時間の9時前に乙女高原に到着。初冬の青空の下の草原では真白いススキの穂が一面に広がっている景色を想像していましたが、車道側のススキは既に刈られていました。大勢の参加者で一斉に草刈りをする「草

刈りボランティア」のイベントが中止になったので、ファンクラブの有志の方々が事前に草刈り作業を実施したと思われる。

9時までに集まった人たちが本日の作業内容の打合せを行いました。植原さんから杭から外したロープの束ね方・縛り方の説明を受けて、さっそく手分けして遊歩道に張られたロープを回収しました。長いロープは50m以上の長さがあり束ねるとかなりの重さで、ロッジまでの運搬にひと汗かきました。末端がほどけたロープは色分けしたテープを巻いて補修しました。ロープ回収作業と並行して、刈払機で遊歩道上側の草刈りも行いました。背丈を超えるススキが生い茂っているので動力を使っても大変な作業です。

作業開始後まもなく、クマよけの音響花火を打ち上げました。乙女高原にはクマの糞やクマダナは見当たりませんが、クマに遭遇しないように念の為の行為です。1時間半ほどでロープの回収作業が終了しましたのでコーヒブレイクです。大きくて柔らかい干し柿や薩摩芋の胡麻和え、カットした林檎、栗の砂糖漬け（手作りマロングラッセ）など色々な差し入れがあり、和気藹々と楽しくいただきました。

準備作業の続きは全員で草刈りです。刈払機と鋸鎌と大鎌を使って作業しました。刈払機では遊歩道の車道と反対側を草刈り、鋸鎌ではレンゲツツジがある処の草刈りを行いました。大鎌で斜面の天辺の方を草刈りしましたが、急な斜面と刈り残すレンゲツツジの若木があり、なかなかはかどりませんでした。

13時前に本日の作業を終了し柔らかな日差しの下でランチです。シフォンケーキやヤマブドウの差し入れがあり、美味しくいただきました。いつもご馳走様です。

本日までの草刈り作業で、草原の半分位が刈取りできましたが、残り半分しかも急な斜面の部分が残っています。11/23に乙女高原ファンクラブの有志で残った部分の草刈りを実施する予定です。

～ 有志による草刈りボランティア その2 ～

11月23日(祝) 記事：植原 彰

毎年200名を超える「乙女高原ファン」が集結する11月23日。今回は第24回・26年目の草刈りボランティアのはずでした。今回の回数(24)と年数(26)の数字がずれていますよね？ これはコロナのために「イベントとしての草刈り」は中止したのですが、2年間「有志で草刈り」したために年数の方が2多いわけです。「草刈りをしないと乙女高原の草原が守れない」という乙女高原ファンの思いです。苦渋の決断は今回だけではなかったんです。

さて、有志による草刈りを呼び掛けたところ、11/23にはなんと71人が来てくださいました。例年の1/3強です。本当にありがたいと思います。ポカポカ陽気で、天候にも恵まれました。遠く愛知から夜を徹して運転して駆けつけてくださった方、秩父からバイクに乗って来られた方などなど。本当に頭が下がります。(株)田丸・田丸グリーン基金の方々が24名も参加してくださいました。乙女高原と兄弟のようなレンゲツツジ草原である甘利山倶楽部の皆さんも駆けつけてくださいました。また、3世代で参加くださったご家族もあり、すごくほほえましい雰囲気でした。

来ていただいたら、受付簿に記入していただき、お茶や手袋、道具をお渡し、順次、作業を始めてもらいました。刈り払い機の方には広い草原の草刈りを、手刈りの方には遊歩道「ツツジのコース」の草刈りをお願いしました。ツツジのコースはレンゲツツジが混みあっているもので、刈り払い機で刈ることができません。ここは、草刈りを始めた2000年には草原内の木々が生長して森になりそうになっていて、たくさんのお木を切りました。そしたら、レンゲツツジは復活。とはいえ、いまだにたくさんのお木が大きくなろうと虎視眈々です。レンゲツツジの株の中から出ている若木などを切っていただきました。今回は残土処分場への草の運び出しができません。だから、刈った草を遊歩道に敷く作業が重要になります。手や熊手で草を集めて、遊歩道に横に敷いていただきました。まわりあまり草のない遊歩道へは、草の多い場所からビニールシートで運んで入れました。なかなかの重労働です。

このような作業を12時すぎまで続け、お昼休みとしました。予定にはありませんでしたが、せっかくなので三枝(三)さんに記念写真を撮っていただきました。来年の草刈りチラシに載せたいと思います。皆さんに、杉田さんが作ってくださった来年のポストカード「乙女高原のキノコ」カレンダーや乙女高原フォーラムのチラシをお渡ししました。

有志の有志20人ほどが午後からも作業を行いました。結局、草を残さず刈ることはできませんでしたが、想定以上にたくさんのお草を刈ることができ、また、遊歩道に草を敷き入れることができました。この成果が出るのは来年以降です。皆さん、ぜひ、花の時期に乙女高原においでください。そして、自分たちが汗を流した結果であるお花畑の景観をぜひ見てください。なお、三枝(か)さんは、もしもの時に備えて救急セットを準備してくださいました。また、角田(敏)さんは作業前にクマよけの花火をあげてくださいました。



～ 有志による草刈りボランティア その3 ～

11月29日(土) 記事：植原 彰

11/15、23と2日間の作業では、さすがに例年の200人分の仕事は無理で、急きよ11/29(土)に、追加の草刈

りを行いました。11人が有志として参加してくださいました。遠く愛知県や神奈川県から駆けつけてくださった方もいました。

午後になって日が陰り、肌寒くなりましたが、午前中はとても暖かでした。草を刈ったり、刈った草をビニールシートに載せて運んで遊歩道に敷き入れたり、草原の中に伸びてきた木を切ったりという作業を、休憩をはさみながら、午後まで行いました。

乙女高原では、昔から(少なくとも江戸時代には)刈った草を使うために草刈りが行われてきました。また、戦後は、スキー場として草原を使うために草刈りが続けられました。そうやって、草刈りが行われてきたので、森になることなく草原がこれまで続いてきました。なぜかという、日本は平均すると三日に一回は雨が降っています。だから、草原があると、周囲の木々からタネが飛んできて、木が育ち、やがて森になろうとします。草原を「守る」ためには草刈りが必須なのです(注:野焼きや放牧によって維持されている草原もあります)。面白いですね、自然を守るために草刈りするなんて・・・。ですが、草原を守ることによって、乙女高原には「森の生態系」だけでなく「草原の生態系」と「森から草原に移行する生態系」も成り立ち、狭い面積なのに、むちゃくちゃ生物多様性が高くなっています。そんな自然の魅力を次世代に譲り渡すために、スキー場が閉鎖となった2000年以降も、市民と行政の協働による草刈りボランティアが連綿と続けられてきました。大事な草刈りだからこそ、今年も有志によって続けているのです。



なお、遊歩道は人が歩くので草が生えにくく、そうすると、雨が降ると、特に斜面では簡単に土が流れてしまいます。登山道が荒れる大きな原因です。これを防ぎ、できれば少しでも修復させるため、刈った草を遊歩道に敷き入れる工夫をしています。始めた年は、遊歩道に縦に草を入れていましたが、これだと遊歩道を歩いた時にツルツルとすべりやすいので、今は、遊歩道に横に敷き入れるようにしています。これまでも、これからもずっと創意工夫・試行錯誤の連続です。

さて、午前中、1時間ほど作業をしたら、みんなでベンチに座ってお茶タイムにしました。いろいろなお菓子や果物などがテーブルに並びました。また1時間したら、みんなでお昼。午後も1時間作業して、お茶にしようとしたのですが、肌寒くなってきたので、道具を片付けて、解散としました。

3日間、多くの人が駆けつけて下さり、しかも、事故やケガがなかったのが、一番よかったです。草原のほぼ全ての草刈りが終了し、今年も乙女高原はきれいになった姿でお正月を迎えられます。今年の草刈りをまとめると、3日間で、のべ97人の有志でした。

第23回 乙女高原フォーラム

1月25日(日) 記事: 鈴木 辰三

山梨市長のあいさつに始まり、1年間の活動報告や乙女高原フェロー認定式がありました。そのあとファンクラブの宇津さんが、この1年間のタイムスリップしたストーリーで「乙女高原のチョウ」について紹介しました。宇津さんは乙女高原で74種ものチョウを確認されているそうです。

そしていよいよメインイベント、北原正彦さんを講師に迎えての講演です。

テーマは「乙女高原の希少蝶類 特に天然記念物ヒメギフチョウの分布、生活史-その価値と魅力-」

昨年、山梨市と甲府市の天然記念物に指定されたヒメギフチョウを中心に、その希少性や魅力についてとてもわかりやすく講演してくださいました。1970年代頃までは多数棲息していたヒメギフチョウが、現在は絶滅の危惧の恐れがあるほどまでに激減したこと・市の天然記念物に指定されるに至った経緯などにも触れ、私たちが保護活動をしていく課題についても提言していただきました。

講演内容の詳細は次号に掲載しますので、どうぞご期待ください。



※フォーラムは山梨CATVにより収録され、後日放映されます。放映後は期間限定でYouTube無料配信の予定です。

雨の中でも植物群落調査

9月20日(土) 記事: 松澤 優美子

9月20日、乙女高原に11時に集合し、調査開始。参加者は高槻先生、植原さん、角田さん、松林さん、和平さん、加藤さん、松澤の7名。13日の訪花昆虫調査も雨曇りの天気でしたが、20日はそれを上回る1日中雨。それも土砂降りに近いので、一番の心配は自分が濡れるより調査票が濡れる事。濡れない工夫をしましたが、残念なことに雨にはかなわず、植原さんの話では、調査票の濡れ具合がひどく、1枚1枚丁寧に剥がして、新聞紙の上で乾かしたそうです。調査票が高槻先生の手元に届くまでの苦労が大きかったようです。

調査票はA4の大きさで、「調査日」「調査開始時刻・終了時刻」「調査ポイントNo.」「記入者名」を上部に書いた上で、各ポイントで確認した植物名を縦30のマス目に書いていきます。各植物は10cm×10cmの範囲で見つかったものか、それより広い10cm×25cmで見つかったか、さらに広い25cm×25cmか、25cm×50cmか、50cm×50cmか、50cm×1mか、最後は1m×1mで見つかったのかをチェックします。このように、範囲をだんだん広げて、その都度見つかった植物名を記録していきました。1m×1mが終わったら、見つかった全部の植物について1m×1mコードラートでの被度（どの程度の広がりがあるか）と高さ(cm)を記入しました。No1のポイントから開始し、全部で10ポイントありました。各ポイントで記入者を交代しました。折り尺で正確に1m×1mのコードラートを設置し、その中で10cm×10cm、10cm×25cm、…と徐々に範囲を広げ、高槻先生と植原さんのお二人がひざまずいて、絡み合った草を手で丁寧にほどこしながら見つけた植物名を告げるので、それを調査票に記入し、だんだん面積を広げ、1m×1mまでやったら終了。記入者が10cm×10cmからの植物名を読み上げると、高槻先生から被度高さが告げられるのでそれを記入しました。1のポイントが終わったら、2のポイントに移動です。自分の背より高い植物群落の中で、草をかき分けて進みます。雨と葉に付く水滴に閉口しながら一心不乱（大げさかな〜）で進みますが、これが私には難義。背が高く頑丈な植物はすぐ跳ね返り、先発隊の姿が植物に覆われて見失い、その都度、松林さんが立ち止まって私と加藤さんを見ると安心したように先に進まれて、助かりました。ありがとうございます。



調査は確実性が命です。改めて調査は大事ですし、多くの人の手がなければ大変だと思いました。雨の中での調査でしたが、楽しかったし貴重な経験でした。ただ晴れていれば先生の手元にある植物を見ることができたのに、それができずに残念でした。もう花の終わったもの、芽生えたばかりのものもあり、そのような状態での植物をいろいろ教えて頂き、草原全体に見る風景と範囲の中での植物がおおよそわかり、見る目も変わるのでは？と自分なりに調査から学ぶことができました。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」ことのない様にしたいと思います。

今年最後の訪花昆虫調査

10月8日(水) 記事：植田 幹夫

2025年6回目の「訪花昆虫調査」を10/8に高槻先生と乙女高原ファンクラブのメンバー9名で実施しました。当初予定の10/4が、昆虫が姿を見せない雨天のため、10/8に延期したものです。今回の調査は、5月・8月と同様に観察ルートを巻き尺で測りながら、ロープから2m奥までの範囲で、昆虫が訪れている花と昆虫の種類・数を記録する従来の(定量調査の)「訪花昆虫調査」です。

乙女高原は青い空が広がりススキの穂が風に揺れて秋の風情です。気温が18℃とやや低めで、ススキの穂やゴマナの白い綿毛の種ばかりが目立ち、遠くから見ると何の花も見えません。チョウやハチが観察できるでしょうか？

11時から調査前の打合せです。参加者は高槻先生と植原さん、井上さん、角田さん、篠原さんご夫妻、加藤さん、松林さん、佃さん、植田の10名です〔電車の都合で高槻先生と迎える角田さんは午後から〕。調査マニュアルに基づいて調査対象昆虫の種類〔チョウ、ガ、ハチ、ハエ・アブ、甲虫、その他の6種類と記録項目〔コース、時刻、距離、花、昆虫〕を確認しました。担当するコースを決定し〔森のコース：篠原さんご夫妻、草原のコース上部から：松林さんと植田、草原のコース分岐からツツジコース：井上さんと佃さん、入口から草原のコース：植原さんと加藤さん〕、早速調査開始です。調査の七つ道具〔100m巻き尺、固定用ペグ、2m折尺、調査中腕章、双眼鏡、記録用紙、クリップボード〕を持って草原に入って各担当コースで調査開始しました。



ヤマラッキョウとウラナミシジミ

森のコースを通して草原の様子を観察しながら担当コースのスタート地点〔草原コース上部〕まで上りました。前回9月に沢山咲いていたゴマナは白い綿毛の種をつけています。シラヤマギクやノハラアザミ、アキノキリンソウ、マツムシソウは咲き残りの花がついています。ヤマラッキョウやリンドウ、ヤマトリカブトが背の高い草の陰で咲いています。ハバヤマボクチは咲き終わり花の先の口が閉じています。富士見ベンチから雪のない富士山が奇麗に見えました。5合目あたりに雲があり腹巻富士山でした。

コーススタート地点にペグを差し、巻き尺の端を固定して、草原の道を下りながら巻き尺を伸ばしていきます。100m下った地点が調査開始点です。上りながら遊歩道右側2m奥までに昆虫が来ている花を探します。花盛りのヤマラッキョウにハエやアブが来ていました。咲き残ったアキノキリンソウには甲虫が、ノハラアザミにはミヤママルハナバチがいました。コーススタート地点まで登り、今度は下りで右側の観察です。ヤマトリカブトやリンドウの花の中に昆虫が潜っていないか双眼鏡で観察しましたが見つかりませんでした。100m伸ば

した巻き尺を巻き戻す作業で、束ねながら回収したコードがこんがらかってしまい苦戦しました。2回目の巻き尺を伸ばしたところで午前中の調査終了です。

楽しい高原ランチの時間です。涼しい高原のそよ風に吹かれながら昼食を摂りました。今回も沢山の美味しいデザート頂きました。大粒のシャインマスカット、桃、カットした梨、栗の渋皮煮、酢漬けのミョウガなど秋の味覚「桃は夏？」を色々楽しみました。ご馳走様でした。

午後は午前中の調査の続きです。1時間ほどで担当するコースの調査が終了しました。ハエやアブが多く、大型のチョウは観察できませんでしたが、ヒョウモンチョウやジジミチョウ、セセリチョウなど小さめの蝶が観察できました。またミヤママルハナバチもノハラアザミで観察できました。

今回の調査で2025年の「訪花昆虫調査」は終了です。5月から10月までの半年間、毎年同じ方法で調査したデータは「シカの食害」「シカ柵の効果」「生物多様性の喪失や回復」などが分かる貴重なデータです。



【参加報告】

甘利山のシカ柵改修作業

10月5日(日) 記事：植原 彰

「甘利山のシカ柵改修」作業に行ってきました。五里霧中の林道を走って、甘利山の駐車場に到着。ファンクラブの角田さん、松林さんも応援に駆けつけてくれました。山小屋「つつじ苑」の中でお茶を一杯いただきながら、甘利山倶楽部・市川さんの説明を聞きました。参加者の中に、乙女高原の調査活動常連・篠原さん夫妻がいらっしゃいました。

身支度をした10人ほどで山道を登っていきました。資材は動力付きカートで運びました。急坂を上った先の平らになった通称「鍋頭(ナベアタマ)」が作業場です。ここには甘利山倶楽部の皆さんが丹精込めて手づくりで設置されたシカ柵が数基あります。設置時期も面積も違って、まるで一つ一つのシカ柵が個性を持っているようで、中の様子も違ってきます。

今日の作業は、3mおきに杭を打ち、杭にポールをかぶせて、そこに網をかけていく作業です。スチール製の1mの杭をハンマーで地面に半分ほど打ち込み、それに長さ2mのポールをスポッとかぶせます。ポールの先端には網のロープを掛けやすいようにくぼみがあります。25mの網の上下にロープを通して、それを数人でほどいて伸ばした後で、今度は端からちょうどいい張り具合にしながらポールにセットします。地面を這っている網の1mごとに固定するペグを打ち込みます。作業を始めるころ、ファンクラブの井上さんと加藤さんが応援に駆けつけてくれました。

今日はシカ柵の改修なので、新しいシカ柵を設置するばかりでなく、古いシカ柵の撤去もしました。じつは、こっちのほうがたいへんで、地面にしっかりと食い込んでいるペグを力づくで抜き、網を丸めて回収しました。ペグの数が多く、おまけに網の間からササや草が伸びてきているので、この作業は、個人的には近年まれにみる重労働でした。おかげ様で、いまだに腰(背筋)が痛いです。今日の分の作業が終了したところで記念写真を撮り、下山しました。つつじ苑では、作っていただいた美味しい豚汁と、角田さんの黄桃のシロップ漬け・ブドウを美味しくいただきながら、お弁当を食べました。

午後は、自己紹介も兼ねて、意見交換をしました。乙女高原と甘利山は、甲府盆地を挟んで位置している双子のような草原で、スキー場の歴史があることやレンゲツツガが有名なことなど、共通点が多々あります。一方、違っているところもあります。一番大きな違いは、草原の保全にとって最も重要になるシカ柵です。

乙女高原では2015年に山梨市が乙女高原を囲む、総延長1km・面積6haのシカ柵を作ってくれました。しかも、このシカ柵は金属製の頑強なものでメンテナンス・フリーです。この柵のおかげで、柵内ではたくさんの草花たちが「戻って」きました。それに伴い、花を訪れる昆虫たちも増えるなど、「草原の賑わい=生物多様性」も戻ってきました。今年1月の乙女高原フォーラムで高槻先生がお話くださった通りです。

一方、甘利山では、甘利山倶楽部の人たちが、それぞれボランティアでできる範囲で小さなシカ柵を多数作っています。中には木製のものもあり、シカに破られないようにするためには毎年の手入れが必要です。シカ柵のメンテナンスに力を集中せざるを得ず、保全のために必要な調査や環境教育などに力を回すのが困難になっているように見えました。



【参加報告】

草原の里交流フォーラム

10月14日(火) 記事：植原 彰

前回のフォーラムには角田さん、三枝さんと3人で参加しましたが、今回は植原一人でした。新宿まで「かいじ」。小田急線に乗り換えて経堂で降り、そこから歩いて東京農大に。少し時間があつたので、すぐ近くの農

大附属博物館と馬事公苑を見学し、学食で「油そば」をいただいて、会場の榎本ホールに行きました。

フォーラムは午後1時から5時までと長丁場。でも、とても濃厚な時間でした。オープニングのあいさつは全国草原の里市町村連絡協議会会長・大分県九重町長の日野さん、東京農大地域環境科学部長の竹内さん、環境省自然環境計画課長の西村さん、農水省農泊推進室長の東さん(代理で課長補佐の浜畑さん)でした。

第1部の記念講演は東京農大・加藤さんの「草原は炭素を固定する～土壌有機物における半自然草原の重要性」というお話でした。半自然草原(人の手が入った、乙女高原のような草原)は炭素固定において重要な役割を果たしているというのが結論で、つまり、草原の保全は地球温暖化対策としても有効だということです。

今年は4つの草原の里が新たに認定され、これで「未来に残したい草原の里」は乙女高原も含めて57箇所になりました。新たに認定されたのは、北上川河口域のヨシ原(宮城県石巻市)、池ヶ原湿原保全・活用協議会(福井県勝山市)、山田牧場(長野県高山村)、神鍋高原(兵庫県豊岡市)で、北上川以外の3箇所については、第二部の中で事例発表がありました。

池ヶ原湿原では「保全・活用協議会」という湿原の保全に関わるいろいろな団体(行政ばかりでなく、企業や教育機関も)の協力組織が作られているのが印象的でした。「湿原」保全には「草原」保全とはまた違った苦労があるんだろうなと思いました。

山田牧場は123年の歴史を持ち、1958年からはスキー場も開設し、観光地という側面もあります。159haという広大な面積で「愛する会」というファンクラブがあるのと、筑波大学の研究者が科学的視点から保全活動をサポートしているのが強みだなと思いました。

神鍋高原では、アウトドアスポーツの方々も加わって、サステナブル・ツーリズムの一環として山焼きを復活させたというストーリーが印象的でした。中核を担う方々が30代・40代という羨ましい状況です。富士山をそのまま小さくしたような高原で、おはち(火口)の内側を山焼きするそうです。

次に、環境省のネイチャーポジティブ推進室室長の奥田さんから自然共生サイトについてのお話がありました。自然共生サイトの元になっているのはOECMという考えで、これは「保護地域になっていないけれど、自然が守られている場所」という意味です。生物多様性条約第15回締約国会議では「今後、OECMの面積も保護地域同様に増やして、2030年までに全世界の30%を自然が守られている土地にしよう(30by30)」という国際的な約束が交わされています。



自然共生サイト

だから、理屈としては「乙女高原のようにすでに保護地域になっているところは自然共生サイト(OECM)にはなれない」ということなのですが、奥田さんの話は、保護地域になっている場所でも、申請があれば、自然共生サイトとして積極的に認定しているというお話でした。環境省では、自然共生サイトの生物多様性保全に企業が支援する仕組みを整備していて、企業が自然共生サイトの支援をきちんとしていたら「支援証明書」を発行し、その証明書を証拠に「私たちの企業は生物多様性保全に取り組んでいます」と報告書等書けるようにしているそうです。

草原の里100選にすでに選ばれている蒜山自然再生協議会(岡山県真庭市)と森林塾青水(群馬県みなかみ市)から、100選に選ばれた後の活動についての報告もありました。

クロージングでは、次回(第15回)全国草原サミット・シンポジウムが行われる大分県九重町から、草原サミット・シンポジウムにお誘いするお話がありました。来年9月5~6日だそうです。最後に、草原の里100選運営委員長の高橋さんから閉会のあいさつがあり、会は終了したのですが、続く懇親会で、多くの「草原を守る活動をしている」方々とお話することができました。行政の人、企業の人、研究者など、それぞれの立場の違いはありますが、草原を守りたいという思いは一緒に、大いに盛り上がり、乙女高原の活動も知ってもらえました。

【課題報告】

乙女高原シカ捕物帳

11月21日(金) 記事：植原 彰

11/21、草刈りボランティアの準備に出かける直前、嫌な予感を感じました。井上さんからのメールには「ツツジのコースから湿地に向かうゲートが開いていました」「森のコースの尾根あたりで鹿が走り去るのがすごくよく見えて、鳴き声もすごく近くで、一瞬、鹿柵の中にいるのかと思いました」とありました。

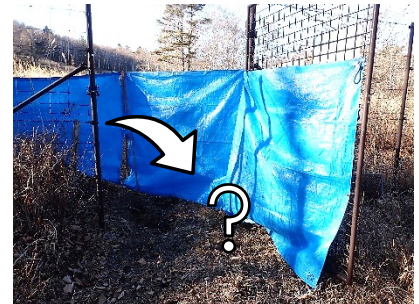
林道の途中で車を止め、側溝の水があふれ、路面凍結しないように側溝の泥上げを済ませ、乙女高原に着きました。シカ柵には出入り用の扉が4箇所ありますが、これらに細工をして回りました。冬の間、扉の開け閉めを金具ではなくチェーンでもらうよう、説明看板を取り付けたり、金具を固定したりしたのです。そうしないと、地面が凍って扉が持ち上げられ、大変なことになります。

「ゲレンデのてっぺん」から「ツツジのコース」に降りる途中、すぐ近くからシカの警戒音が聞こえます。そこはシカ柵がL字に折れ曲がっているところなので、シカはL字の向こう、つまり柵外にいるのだらうと思っていました。ところが、シカは柵内を走り回っていました。少し近づいたら、体がはっきり見えました。メスと今年生まれた子の2頭でした。しばらく観察しました。柵に沿って行ったり来たりし、時々、柵に体当たりしています。必死で外に出ようとしているんですね。柵に沿って走っているの、うまく誘導すれば、私一人でも、出口から追い出せるのではないかと思います。

シカ柵の扉を開けてから、シカの母子をあまり刺激しないように、そっとシカ柵にそって歩いて、シカを扉の方に誘導しました。こちらに来そうになったら、「あっちだよ!」と話しかけたのですが、それが刺激になったようで、柵に体当たり。シカとの距離が詰まって、シカの様子がよく見えるようになりました。鼻のあたりが真っ赤です。柵に体当たりして、ケガをしたのだと思います。もう少しで出口。うまくいきそうだったのですが、あんなに何回も柵に突っ込んでいたのに、出口に突っ込んで行かないスルーし、向こうのやぶに入ってしまった。やぶの反対側に回って、そっちから追い込んだのですが、またしても失敗。

一人では無理だとあきらめ、乙女高原を後にしました。スマホの電波が通じるころまで下って、代表世話人の角田さんに報告しました。こういう緊急時に乙女高原でスマホが通じないのは本当に困ります。角田さんは「すぐ行くよ」と言ってくくださったので、乙女高原に戻って、全部の扉を開け、シカ柵に沿って歩いていたら、角田さんが来てくれました。

角田さんがシカを追いかけている間、私は、谷地坊主側の扉に仕掛けを設置しました。扉のすぐ近くに2011年に設置した15m四方のシカ柵がそのまま残されており、現シカ柵との間が狭い通路になっています。さっき、シカはこの通路を通って、通路が途切れたところでサッと走って行ってしまったので、通路の終わりからシカ柵の出口までをビニールシートで道を作り、誘導すれば、スムーズに出てくれるのではないかと考えたのです。漁師さんが仕掛ける定置網のようなものです。ロッジからシートや長い杭、結束バンドを持ってきて、通路を作りました。我ながら、うまいアイデアだと思いました。



角田さんが来ました。1頭は森のコース上の出口から出たとのこと。もう一頭をこの定置網に追い込んでくれました。あと10mほどで定置網!というところで、シカはスッと消えてしまいました。「どこ行ったかねえ」「出たかねえ」ここまで追い込んで、他の場所に行ったように見えなかったもので、シカは柵外に出たのだろうと判断しました。念のためにシカの有無を確認しながら、扉を全部閉めて回り、帰路に着きました。もしもの時に備えて定置網は残しておきました。

翌11/22、気になったので乙女高原に行きました。定置網の扉を開けてから柵に沿って2周、ゆっくり回りましたが、シカの気配はまったくありませんでした。安心して、翌11/23の草刈りを迎えました。

11/23、事態は急変。なんと、柵内にシカが残っていたそうです!! 草刈りをしていた宇津さんがシカを見つけ、機転を働かせて扉を開け、シカを誘導したところ、柵外に出ていくのを視認したそうです。「この二日間のオレの苦労はなんだったんだ」と思いましたが、シカが外に出てくれて本当によかったです。

乙女高原を囲う周囲1kmのシカ柵設置は2015年。お披露目されたのは草刈りボランティアの日でした。ですから、シカ柵設置からちょうど10年。3,650日です。この間、私は扉の金具が外れているのを一回も見せていません。それだけ乙女高原を訪れる人々が気を付けてくださっているのだなあ、ありがたいなあと思っていました。ところが、たった1回、扉が開いていただけで、シカが入ってしまいました。1÷3,650は0.00027…。たった0.027%です。限りなく0%に近いですが、それでもシカは入ります。扉の開け閉めには一層気をつけたいと思いました。

【自然観察交流会】 氷華に感激!!

12月6日(土) 記事: 伊佐治 庸子

12月の自然観察会はこれが初めての参加。さあ、今日は何が見られるのかな?

集合場所の道の駅牧丘にほぼ1年ぶりに見る顔が。「あら、お久しぶり。ええと、徳川さん?」「惜しい。」「豊臣さん?」「う〜ん。」「織田さん?」「もっと西」「あ、毛利さんだ!」なんて会話をしているうちに集合時間になった。植原先生が「今日は氷華を見に行ってみましょう。」と。3台に分乗してまずは杣口サワラ林のポイントへ向けて出発。初めて見る”氷華”。「あっ、ある!」「す、すごい!」「うわあ!」とまあ、あちらこちらから声上がる。そのたびに私は「え、どれどれ?」と顔を突っ込む。声上がるのには理由がある。どれ一つとして同じ形、タイプがないのだ。自分が最初に見つけた氷華が如何に美しいか、奇天烈か、不思議か、皆に教えたくて仕方ない。

そんな中でも井上さんは研究者の冷静な目で解析を行う。「おととい雪が降りましたよね。その後ぐっと寒くなったので、この層は昨日できてここは今日できたんでしょう。」フムフム、氷華作成には水分と寒さが必須なんだな。これまたいつでも落ち着いた態度を崩さない鈴木さんが黙々と写真を撮っている。

すると植原さんが「あっ」と小さい声を上げて何かを見つけた。先が緑色の小さな羽根。「アオバトです。これは珍しいですよ。」緑なのに青とはこれ如何に? さあ、そこから始まる植原クイズ。日本では緑を青と言いました。では、青は何



カメバヒキオコシの氷華

と言ったでしょう。答え、「瑠璃」。おお、瑠璃色の地球だ！調子に乗った私は、「いたるところ青山あり」なんて言ったものだから、Mr. 篠原さんに「青山はお墓のことだよ。」とたしなめられてしまう。御尤もです。人間どこでも暮らしていけるのです。

杣口サワラ林を後にして次の目的地、小檜山林道へ。あら、あらあら。ここの氷華は更に芸術的だ。どうしたらこうなるんだとその形成過程を知りたくなるようなユニークな形のものがたくさん。どなたかタイムラプスで撮影してもらいたい。氷華の質感は、薄絹のなめらかな光沢の美しさにウスバカゲロウの翅の透明感、はたまた飴細工のボテツとした白、新玉ねぎの薄い皮の繊維感もあるなあ。Mrs. 篠原さんと、この氷華はまるで〇〇みたいねと盛り上がる。氷華の多様なその姿は実物を見るに限るが、形のタイプに名前をつけてみたので妄想してみてください。ユリ、プロペラ、ヒガンバナ、カタツムリ、アフリカヤコウガイ、くす玉、フリル、リボン、カイゼル髭、雷神のたなびく衣、メビウスの輪・・・どうでしょう？イメージできましたか？ 氷華の観察で既に大満足だったが、途中合流した加藤さんを加え乙女高原を1時間ほど散策。地面の霜がまるでスワロフスキーのクリスタルのようで綺麗だった。樹名板が増え（設置ありがとうございます！）、ツノハシバミがこんなにあったのかと驚いた。

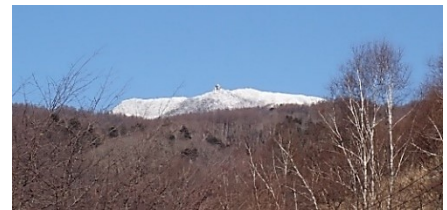
皆でお昼を囲み、午後は午前中から草刈りボランティアをしていた芳賀さん三枝さんに合流して1時間ほど除草伐木作業を行い3時前に現地解散。青空の冷たい空気だが良いお天気だった。



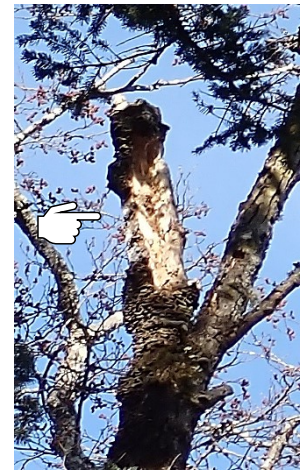
【観察報告】 あっ、オオアカゲラだ！

12月27日(土) 記事：植原 彰

12/27、柳平の気温-3℃。金峰山は真っ白ですが、乙女湖は凍っていません。林道も凍ってはいませんが、はしっこに雪が残っていました。おっ、林道を横切ってヤマドリが飛んできました。尾っぽが長いです。草原に着き、ロガーのデータを回収し、ロガーを再設定しました。10/30から12/27の2か月間の平均気温は2.2℃、最高気温は13.5℃、最低気温は-11.5℃でした。鳥はカケス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ツグミ、トビを確認。標高1,700mの冬にヒヨドリがいるんですね。



今日はとてもラッキーでした。ロッジ庭の東屋の向こうから、木を叩く大きな音が聞こえてきたので、もしやと思い、音のする方に少しずつ近づいては止まり、目ぼしい所を探しました。きっと枯れ木にいるに違いありません。しかも太めの。お、あそこが怪しい。枝全体がつつかれすぎて、材が露出しています。じっと見ていたら、現れました。濃い赤のベレー帽をかぶったキツツキ。オオアカゲラです。おっと、飛んで行ってしまいました。でも、大きなコツコツという音は、まだ響いています。そんなに遠くではなさそうだし、近づいても逃げる気配があまりなかったので、歩いて姿を探しました。そしたら、見通しのいい枯れ木にいました。これは幸運！じっくりゆっくり見ることができました。



見ている前で、枯れ枝の皮を剥がし落としました。結構な広さです。皮を落としては、残った皮のすきまをのぞいています。作業を積み重ねて、A4くらいの広さの皮を剥がしてしまいました。そうか、今度、高いところの(太めの)枯れ枝の皮がはがされていたら、オオアカゲラを疑えばよさそうです。体の様子もじっくり見えました。お腹はピンクっぽい灰色に黒い筋が何本も。足の付け根の羽毛はきれいなピンク。時々、立ち位置を変えてくれるので、背中の様子がよく見えます。白黒というより黒地に小さな白い斑点がある感じです。

オオアカゲラを見ることはできましたが、こんな寒い季節に、わざわざこんな山の中の沢に単独で渡ってくるというアオシギの姿は見られませんでした。

それにしても、この斜面、不思議です。ちょうどミヤコザサとスズタケの境界線になっています。ミヤコザサは背こそ低いです、そこそこ生えています。一方、スズタケの多くは稈(笹の茎のようなところ)だけになっていて、枯れ木が林立しています。シカの影響?と思いましたが、それにしても、ミヤコザサに食痕が見つかりません。草原の「レンゲツツジのコース」では、シカ柵のすき間に頭を入れて、柵内側のミヤコザサを食べていたのに、ここは、これだけたくさんのミヤコザサが生えているのに、手つかずなのです。この場所で起きているストーリーが読み解けませんでした。

今日も一日、寒かったです。クリスタルラインの方も少し歩きましたが、クマ棚は見つかりませんでした。

正月三が日明けの1/4、乙女高原に行きました。林道の途中、葉っぱの落ちた木々にヤドリギのまるい株が付いているのが目に付きました。12/27には金峰山は真っ白でしたが今回は青いところが増えていました。相変わらず乙女湖は凍っていません。焼山から乙女高原間の林道の一部で積雪がありましたが3cmくらいでした。

草原に着きました。雪はありません。今回は乙女高原のドライフラワーたちをじっくり観察しました。

レンゲツツジの実を上に向けて開いており、そのまま仏壇に飾ってローソクを立てたくくなります。フィールドノートにスケッチしました。実の底にはタネが溜まっていて、強風が吹くと上部の開いたところからパラパラと落ちてくるようです。手のひらにとってみると、2mmほどのちっちゃなタネです。周囲に薄い膜をまとっています。それが翼の役目になり、より遠くまで飛ばされるのでしょ。



レンゲツツジの実。燭台？

アヤメの実も上に向けて開いていますが、中の黒っぽいタネはレンゲツツジほど小さくなくて、翼も付いていません。パラパラと落ちるだけのようです。ノコギリソウはタネが露出しています。茎を振ると、パラパラ落ちました。

シモツケは小さな星型の実が上を向いてきれいに並んでいます。星の頂点は五つで、中心から頂点に向けて割れ目が走っています。その割れ目から小さなタネがこぼれ落ちてくるようです。レンゲツツジもアヤメもシモツケも実(み)は「上向きに開いて」いて、普段は実の底に溜まっているタネが、風が吹いたときにパラパラとこぼれ、散っていくのは共通しています。以前、乙女高原に来てもらったことのある多田多恵子さんは、これらを「塩コショウ方式?でタネを振りまく」と表現していて(多田多恵子『種子たちの知恵』NHK出版)、うまい言い方だなあと感心します。さらに面白いのは、シモツケはバラ科、キリンソウはベンケイソウ科と分類学的には遠縁なのに「星型の実が上向きにきれいに並んでいて、しかも星に割れ目がある」のがそっくり。キリンソウも塩コショウ方式です。



キリンソウの実。上向き星々

ヤマラッキョウは、ガマグチの集合体。小さな小さなガマグチが押し合いへし合い集まっている感じです。ガマグチの中が空のものもあれば(これぞ殻!)、中にタネが入っているものもありました。黒くて、粒々したタネです。一つの実の中に一つのタネしか入っていないように見えました。お昼は陽だまりのベンチで食べました。フリーズドライの豚汁をマグカップで飲みましたが、美味しいし、お腹が温まるし、いいですね。朝自分でにぎったおにぎりも美味しかったです。

午後も引き続き、草原の中を歩きました。ハチの巣が落ちていました。スズメバチの仲間の巣なのですが、大きさはハンドボールくらい。茶味はなく、薄いグレーです。キロスズメバチやオオスズメバチの巣の表面には半円の波のような模様が重なっていますが、この巣の模様は平行に縞がある感じです。木星の表面の縞々みたいです。ホオナガスズメバチの一種でしょうか。壊れかけていたので、割って、中を見て見ました。アシナガバチの巣のような巣盤が2段になっていました。巣には六角形の幼虫の部屋があり、今はもちろん空き部屋です。でも4つほど空き部屋からカプセル状の突起が飛び出ていました。最初は女王蜂用の特別室かなと思いましたがカプセルの中を調べてみると、ミイラ化したハチの死体が出てきました。もしかしたら、コマユバチみたいな寄生蜂にやられた痕だったのかもしれませんが。ヒヨドリやツグミの声がよく聞こえました。今日もアオシギには会えずじまい。本日、データロガーのデータを回収する予定だったのに肝心のパソコンを忘れてしまいました。明日、時間があつたら、また来ようっと。



【オピニオン】 今年のクマ出没の多さをどう考えるか

記事：植原 彰

テレビや新聞で毎日、クマ出没やクマによる人身事故のニュースが流れます。いったい日本のクマは、日本の山はどうなってしまったのか？ 私の頭は大混乱です。クマが人の命を奪う事件が多発し、亡くなった方々の無念や周囲の方々の悲しみを思うと、いたたまれなくなります。命は助かったとしても、私もツキノワグマ爪のレプリカを持っていますが、あんなのでひっかかれたら大変です。一方で「アーバンベア」といった恐怖をあおるような表現も散見され、これでいいのか悶々としします。

この問題をどう考え、対処すればいいのでしょうか？ 私見を述べます。皆様のご意見もお聞きしたいです。

◆「そもそも」の話・とりあえずの話

どう対処していいか悩んだときには、その問題について「そもそも」の話と「とりあえずの話」に分けて考えるとよい…というのが、乙女高原の活動で私が学んだことです。

「そもそも」の話というのは抜本的に考えて対処を練るということです。そのためには起きていることの実態や原因を丹念に調べ、考え、そして議論しなければなりません。ところが、事実や原因が十分明らかになっていない段階でも決断を求められることがあります。とりあえず不十分な状況証拠から考えて、たとえば、「11/23 草刈りボランティア実施の是非」をとりあえず決めなければなりません。これが「とりあえずの話」です。時間は待ってくれませんが、他イベントの実施状況も気になります。同調圧力だっかかりかかります。

こんな時に大事なことのひとつ目は、「そもそも」の話も「とりあえずの話」も同じ問題を見ているということです。ですから、「そもそも」をするときも「とりあえずの話」を意識しなければ「机上の空論」になってしまうし、「とりあえずの話」をするときも「そもそも」につながるようにしなければ「よりよい選択」にほど遠くなります。

大事なことの二つ目は、相手は「とりあえずの話」をしているのに、自分は「そもそも」をしている…というように、議論がかみ合わない危険性です。同じ問題について話をしているのですが、「とりあえず」の視点なのか「そもそも」の視点なのかをお互いに絶えず意識しなければ、有意義な議論になりません。

◆「とりあえず」決断するにあたって

「とりあえずの話」だからといって、今までに自分が見たり聞いたりした情報だけで判断するのは危険だし、「よりよい選択」になりません。テレビやネットのニュース、新聞で報道されているのは事実だと信頼しますが、同じ事実でもどんな角度から見るかによって違って見えます。ニュースや記事は時間や紙面の制約があり、なおさら角度が狭くなりがちです。そんな中、(11/7 テレビ朝日 20:00-の「タモリステーション」)は十分な時間をかけて、いろいろな視点から「クマ問題」を追った、いい番組だったと思います。見逃し配信されていないのが残念です。

さて、様々な情報の中でも信頼度が相対的に高いのは、公共機関からの情報です。山梨県は [ツキノワグマ出沒に対する注意について\(※1\)](#) というサイトでツキノワグマ情報を公開しています。このページの中に「ツキノワグマ出沒マップ」というのがあって、いつ、どこで、クマが出たのかわかるようになっています。地図上の「！」マークはクマ出沒地点を表し、クリックすると吹き出しで詳しい情報が出てきます。これを見ると、倉科(7/17)、西保下(同日)、三富徳和(8/6)、柚口(10/28)の4件が「乙女高原から最も近そう」「山梨市内の」情報です。7月や8月の情報は「近い」情報か？ 柚口や三富徳和は乙女高原に近いと言えるのか？ 皆さんはどう思われますか？

「クマの被害に遭わないために」という、2ページのリーフレットもありますが、これは概要版なので、もう少し詳しく知りたい方には [山梨県ツキノワグマ出沒対応マニュアル\(※2\)](#) をお勧めします。ただし、作成が「平成19年3月」(2007年)と20年近く前なので、今年のクマ状況は反映されていません。

ちなみに植原の乙女高原でのクマ観察記録というと、2002年7月に大窪山北斜面でクマの糞を発見しています。一部持ち帰り、内容物を調べたところ、おびただしい数のアリのバラバラ死体が出てきました。もう一つは、2019年11月、シカ柵内のヤマナシの木の下でクマの糞を見つけたことです。ブログでも紹介しています。クマは木に登って食事をする際、木の実を採った枝を折って、尻の下に敷く習性があります。ですから、クマが食事をした後の木には、枯れ枝が折れ重なっている部分が見られます。これを「クマ棚」と呼びます。山梨市内だと、植原は西保の山中でクマ棚を見たことがあります。でも、週に1回以上のペースで訪れていますが、乙女高原で見た記憶はありません。11/4の事前草刈りの後、特に注意して見つけ回りましたが、見つかりませんでした。このようなことから、個人的には、乙女高原はクマ棲息のエリア内であることは確実ですが、クマの密度は低く人前にクマが現れる可能性は非常に低いのではないかと考えています。

◆「そもそも」を考えるにあたって

クマ問題の「そもそも」を考える上で水先案内人のような本があったらと本棚を探したら、ありました。高槻成紀著『野生動物と共存できるか 保全生態学入門』(岩波ジュニア新書)。表紙がまさにツキノワグマのイラストです。この本でツキノワグマを扱っているのは2箇所ありました。改めて読み直しましたが、今年の状況やそれに対する社会の反応を予見していたような内容がありました。また、「クマ問題」に基本的にどのような態度で臨めばいいのかのヒントもありました。少し長いですが、一部引用させていただきます。

「2004年の夏から秋にかけて、北陸や東北の日本海側でツキノワグマの出沒が報じられて話題になりました。例年に比べてケタはずれに多くの報道がありました。これはどういうことなのでしょう。クマが増えたのではないかという意見もありますが、そうではなさそうです。というのは、クマは体が大きいため、大量の食物と広い生活の場を必要とするので、もともと一定の場所にそれほどはすんでいませんし、繁殖の特徴からいっても急に増えるとは考えられないからです。クマはおもに果実や種子などの植物質



*1 出沒に対する注意



*2 出沒対応マニュアル

を食べるのですが、冬眠をひかえた秋には脂肪をためるために大量のドングリを食べなければなりません。ところが、ドングリは年によってなる年とならない年があるので、それに応じて生活の場所を移すのです。ですから、山の果実とくにドングリがない年に、クマが里にある農作物などを食べにくることはおいにありそうなことです。しかし、このような年はこれまでに何度もあったはずですから、この年だけが特別だったことの説明としては不十分です。

最近、農山村には人が少なくなりました。クマのような大きくて強い動物でも人間は恐ろしいですから、人がいたところで農作業をしていた時代には、野生動物にとって人里は近づきたくない場所でした。しかし、最近はそのでなくなつたために、人をあまり恐れないクマがいるようになったのです。このような状況があるところに、山の果実が不作だったために、人を恐れないクマが人里に接近したというのが背景にあったものと思われます。つまりクマとの出会いが多くなったことは確かですが、それはクマが増加したからではないのです。

このように、自然界でおきていることを正確にとらえるのはかんたんなことではありません。クマの出没があると、マスコミの記者たちが原因について安易な質問をし、それを単純化して結論めいたことを言ったり、無用な恐怖をあおったりしましたが、こういう態度はよくありません。なんといつても事実の確認がたいせつであり、結論を出すことには慎重でなければなりません。また問題を狭い範囲でとらえないで、広い視野に立って長い時間でものごとをとらえることが大切です。」(5-6 ページ)

この本は2006年に出されています。20年も前です。20年あれば、自然は変化します。ですから、「クマが増えたのではないか」という意見もありますが、そうではなさそうです」というところなどは、現状と違っているかもしれません。とはいえ、クマ問題の「そもそも」をどう考えればいいのかを教えてください本です。

日本のように小さな島国に、しかも、文明が発達し、人口密度もハンパない国に、大型ほ乳類であるクマが2種類も暮らしているのはすごいことです。問題はありますが、今も日本でヒトとクマが「共存」していることは確かです。とはいえ、自然も人の社会も変化しますから、それに合わせた、豊かな共存のあり方を、自然観察を駆使し、模索しなければならないと思います。

重要 2025年度定期総会のご案内



3月15日(日)
午後2時～5時
山梨市役所牧丘支所

今年も定期総会の時期になりました。総会では今年度の活動を振り返り、来年度の活動計画を話し合います。「乙女高原を次の世代に引き継いでいくに、どんな活動しようか」様々なご意見をいただきたいと思ひます。

今年度から総会への出欠確認はフォームにて行ひます。
普通会员の皆様は必要事項をご記入ください→

(この会報が「紙」で届いた方は普通会员です!!)



*** お知らせ ***

乙女高原自然観察交流会(3月)

日時: 3月7日(土)

集合: 9:00 道の駅「はなかげの郷 牧丘」(乗り合わせて高原へ)

持ち物: 弁当・水筒・観察用具・防寒着

◆町の駅やまなし常設展示

JR中央線・山梨市駅北口にある「街の駅やまなし」のスペースをお借りして、乙女高原展を開催しています。掲示板1枚と長机1脚だけのミニミニ展ですが、毎回テーマを決めて1~2か月程度で展示替えしてきました。ただいまシーズン53「宇津貴史 乙女高原のチョウ パート2」を開催中です。山梨市駅近くにおいでの際は、覗いてみてください。



◆「乙女高原ファンクラブ」入会パンフレットができました

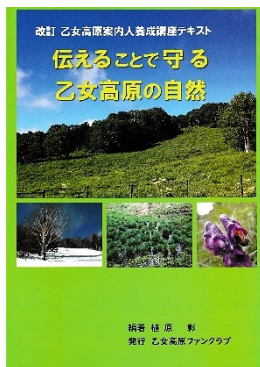
カラー版です。サイト上でも見られます。

なお、フォームから入会できるようにしました。周囲の方にぜひお勧めください→



入会フォーム

●今号は編集を鈴木辰三、校正を井上敬子さん・廣瀬晴美さん・植原彰さんが行いました。その後、芳賀月子さん・三枝かめよさんの印刷、芳賀月子さんの発送作業を経て、皆様に届けられる予定です。総会の出席、よろしくお祈りします。



乙女高原ファンクラブの刊行物

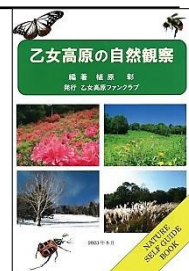
乙女高原案内人養成講座のテキスト

『伝えることで守る 乙女高原の自然』

(A4判 270頁 2024年)モノクロ。2006年テキストの増補改訂版。頒価 1,500円。送料は1~2冊430円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原を歩く際のお供に『乙女高原の自然観察』

(A5判 30頁 2023年)オールカラー。1ページに1テーマ。頒価 300円。送料は1冊:180円、2~8冊:270円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。



乙女高原とファンクラブ11年間の集大成『乙女高原大百科』

(A5判 602頁 2013年)乙女高原メールマガジン11年間の中身を編集した厚さ3cmの本。一部カラー。頒価 2,000円。送料は1~2冊なら430円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。



乙女高原フィールドガイド シリーズ ……欲しい方は事務局までご連絡ください



フィールドガイドⅢ スミレの観察のおともに

『乙女高原のスマレ・ウォッチング』

→在庫切れ

フィールドガイドⅡ マルハナバチ観察と調査のおともに

『マルハナバチ ウォッチング 改訂新版』

フィールドガイドⅠ 春から夏にかけて咲く草花のガイド

『乙女高原のお花たち 第三版』

いずれもA3判。両面カラー。折りたたみ済み。ポケットに入れられるサイズになっています。

■乙女高原ファンクラブの普通会员になりませんか？

『数は力』という言葉があります。ファンクラブの会員が多くなれば、それだけ乙女高原の保全に対するファンクラブの発言力が増します。まわりの方をファンクラブに『巻き込む』ことも乙女高原を守る活動の一つです。まわりの方にファンクラブをお勧めください。

乙女高原ファンクラブに入会するには…「入会します 氏名・郵便番号・住所・電話番号」というファックス、メール、手紙等を事務局までお届けいただければ、いつでも、だれでも会員になれます。

- ・入会金も年会費もありません。乙女高原を守る力が1人分、大きくなります。
- ・普通会员には年4回、サポーター会員には年1回、ニュースレターが届きます。

今号は普通会员のみにお送りしています。

■乙女高原ファンクラブへの連絡先■

【事務局】植原 彰(方) 〒404-0013 山梨県山梨市牧丘町窪平 1110-3

TEL 090-7246-8625 FAX 0553-35-3682 電子メール otomefc@fruits.jp

※会報への原稿や写真等の投稿もこちらにお送りください。

WEB <https://fruits.jp/~otomefc/>

●郵便振込●番号：00220-8-71093 加入者名：乙女高原ファンクラブ

●ゆうちょ銀行●店名：029店「当座預金」番号：0071093 加入者名：乙女高原ファンクラブ



ホームページ



フィールドノート
旧観察ブログ



アーカイブ
旧活動ブログ



乙女高原後援会
フェイスブックグループ



Instagram